ちょっと名大史

235

石田 元季 ― 異色の学士院賞受賞者 ―

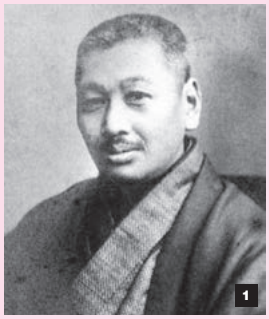
今年3月刊行の名古屋大学編『名古屋大学の歴史 1871～2019』（名古屋大学出版会）の上巻では、これまであまり注目されてこなかった国文学者を取り上げました。1940（昭和15）年の帝国学士院賞（現日本学士院賞）受賞者、石田元季（もとすえ）（1877-1943）です。今年の『名古屋大学プロフィール』の受賞者一覧にも新しく名前を載せました。

石田元季は、1877（明治10）年に京都で生まれました。父元長は元知恩院門跡家士で漢学・国学者でしたが、石田が7歳の時に亡くなっています。石田は、宮家士族の子弟のための私塾である平安義黌（ぎこう）を15歳で卒業します。これが最終学歴で、ほとんどが帝国大学出身であった当時の学士院賞受賞者の中では異色の存在でした。

石田は、京都の小学校教員を経て、1899年に愛知県第一中学校（現県立旭丘高校）に教員として赴任し、以後の生涯を名古屋で過ごすことになりました。その後、私立明倫中学校（現県立明和高校）の教員などを務めた後、1920（大正9）年に名大医学部の前身である愛知医科大学の予科に教授として着任、31年までその任にありました（講師としては33年まで在職）。大学予科とは、大学の準備教育を行う高等教育機関です。石田の研究活動が最も旺盛であったのは、この愛知医大予科時代でした。

石田は幅広く国文学を研究しましたが、受賞の対象となったのは、それまでの俳諧研究の集大成として1938年に刊行した『俳文学考説』です。石田の周りには若い国文学研究者が集まり、名古屋国文学界の指導者として、次代を担う人材を多く輩出しました。

石田の事蹟は、国文学研究や学校教育にとどまらず、地域の文化振興にも及びました。例えば1926年には、名古屋で初めての本格的な郷土研究誌『紙魚（しみ）』（月刊）を創刊しました。そのほか、雅楽や邦楽、能、謡曲などの古典芸能の振興などにも尽力しています。



1　愛知医大予科時代（1924年）の石田元季（石田元季先生事蹟調査・この糸会編著『国文学者　石田元季伝』（風媒社）より。写真2、3も同じ）。中学校勤務時代から、授業が面白いことで定評のある人気教師であった。
2　石田が主宰した愛知医大俳句会の記念写真（1933年）。
3　帝国学士院賞授賞式に臨む石田（1940年5月）。この年は、9年後にノーベル賞に輝く湯川秀樹や、歌人の斎藤茂吉なども受賞している（湯川は恩賜賞）。
4　鶴友会館（鶴舞キャンパス内）の前庭「香菓園（かぐのこのみのその）」に建てられた歌碑（愛知医大予科同窓会橘会が1982年に建立、写真は2022年7月撮影）。刻まれたのは愛知医大予科の校歌「源清き」で、石田の作詞による。「香菓」は橘を意味し、橘は徽章のデザインになるなど同予科のシンボルであった。

BRIEF HISTORY OF NAGOYA UNIVERSITY

名古屋大学の卒業生、
現役・退職後の教職員の方々へ

名大史をつむぐ資料を
大学文書資料室に！

■ **在学時の配布物**
（学生便覧、シラバス、試験問題、課外活動の資料…）

■ **教育・研究活動、大学・部局運営に関する資料**
（各種書類、会議のメモ、備忘録、スクラップ記事、写真…）

■ **校費による印刷物・刊行物**
（冊子、パンフレット、ポスター…）

■ **ご退職関係の記念冊子・記念論集・業績集…　　など**

※その他、ご処分予定の資料についても、まずは下記へご一報ください。

東海国立大学機構大学文書資料室
TEL 052-789-2046
Mail nua_office@cc.nagoya-u.ac.jp